



ほんものを たべよう

提出日
2/ 火 水 木 金
20 21 22 23

配達日
2/ 火 水 3/ 木 金
27 28 1 2

翌々週分配達日
3/ 火 水 木 金
6 7 8 9

2018.3月1週号

オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

○「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。

○「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。

○原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。

○プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

オーガニックコットン製品 ORGANIC COTTON

心も身体も幸せに包む オーガニックコットン製品

気持ちのいい毎日のために。

(株)アバンティ

文責 西川 榮郎(NPO 安全な食べものネットワーク オルター 代表)

使う人の立場に立った オーガニックコットン製品

(株)アバンティ(avanti inc.)渡邊 智恵子代表は「PRISTINE(プリスティン)」のブランド名でオーガニックコットン製品を生産しています。オーガニックコットンの輸入販売、糸・生地から製品まで一貫した企画製造販売をしています。レディースウェア、アンダーウェア、服飾雑貨、寝具、バスグッズ、ケアグッズ、メンズウェア、ベビーグッズまで、一堂に展開しています。いずれも使う人の立場に立って、細やかな工夫を重ねています。

テントウムシが活躍

プリスティンが使う原綿のオーガニックコットンは、アメリカ、インドなどのオーガニックファーマーたちが育てたものを中心に使用しています。

3年以上農薬や化学肥料を使わない畑で有機栽培されています。畑の土が痩せないよう「輪作」をしています。畑で害虫駆除に活躍するのは「ナナツホシテントウムシ」です。収穫に際しても落葉剤を使いません。霜が降り、葉が自然に枯れるのを待って収穫しています。

メイドインジャパンの優れた技術

原綿を日本へ輸入したあとの製糸・紡績などの工程は、全て日本の技術で行っています。提携工場は約200社に及びます。顔のみえるものづくりを徹底しています。一般の繊維業界がほぼ100%海外発注している時代にあって、たいへん珍しく、素晴らしいことです。

人の手を省かない糸

布は糸で決まります。アバンティは糸づくりは命と考えています。個性ある糸づくりを求めて全国を訪ね歩いてきました。「水撚り」もその一つ。日本が誇る糸の技術です。

文字通り、一本の糸を数本撚り合わせていく過程で、細いノズルから、水しぶきを浴びせるように絶え間なく水をかけていきます。こうすることで糸は緩み、平均に撚りがかかり、乾かしたあとに強く美しい糸になります。また、糸に均等に撚りがかかることによって、布の表面に美しい皺(しぼ)があらわれ、

さらりとした肌触りが生まれるのです。いまは技術者も減った、こうした技術こそオーガニックコットンに活かしたい、とアバンティは考えています。

糸は、北は山形県の米沢から南は愛媛県今治まで、各地の織物の産地で、腕の良い職人たちによっていろいろな表情の布に織られています。工場によって得意とする布はそれぞれ違いますが、共通していることは、人の手を省かないことです。

化学薬剤を使わない

プリスティンに使用する生地は、塩素系漂白剤、定着剤、蛍光増白剤、防縮剤などを使わず、無染色にこだわっています。生成り、もしくはカラードコットン(もともとの天然の色、黄や緑色)の天然の色のままです。

柔らかいウスバカゲロウの羽のような布、ふんわりと思わず顔を埋めたいような布、シャリシャリと小気味よい感触の布など、膨大な数に及びます。

皮膚疾患の苦しみからの解放

製品は肌にも心にも「やさしい仕様」のデザインになっています。素肌にストレスを与えず、家で洗って長持ちする、いろんな場所で使いやすいなど、やさしい工夫に溢れています。

「服」という漢字は、薬を服用する「服」からきています。着るものは、食と同様、まさに健康と関係することを昔の人は見抜いていたということです。プリスティンのオーガニックコットン製品に生まれることは人として大きな幸せだと思います。

布おしめのすすめ

プリスティンは「布おしめ」にもこだわっています。紙おむつだとおむつがとれる時期が非常に遅くなり、とれたあともおもしろが長く続きます。資源の問題、経済的側面からみてもバカにならない時間です。最近若い女性の軽失禁が増えています。このこととも関係している可能性が大です。大人になってからの心と身体に影響しています。紙おむつは燃焼時にダイオキシン発生の問題もあります。

布おしめは子どもたちにとっても早くに自由に走り回れるようになり、足腰の成長に大きく関係してきます。お母さんに



渡邊 智恵子代表

いつもお尻のことを気にかけてもらえることによる情緒の発達も大きいです。

日本初のオーガニックコットン業者

アバンティの渡邊 智恵子代表がオーガニックコットンに取り組み始めたのは1990年のことです。当時はオーガニックという言葉が今ほど世の中に知られておらず、ましてやオーガニックコットンのことなど誰も知らなかった時代です。

渡邊さんは北海道斜里町の農家の生まれです。大学を卒業した時、どうしても大手企業には就職したくなく、これから伸びていこうな会社の方が自分に合っていると考え、まだ小さな貿易会社に勤めました。

そして、30歳になった時、その会社の副社長に抜擢されました。さらに33歳にはその会社の子会社として「アバンティ」を立ち上げ、女性社長となりました。独立してまもなく、その後人生をかけることとなるオーガニックコットンに出会い、日本初のオーガニックコットン輸入業者になりました。

当初、生地での輸入を考えましたが、アメリカの製品は雑で、結局原綿だけ輸入に切り替え、糸づくり以降の製品化はクオリティーの高い日本の職人さんたちに託すことになりました。

オーガニックコットンの品質を保証するため、テキサス州のオーガニックコットン・ファーマー協会とアバンティが中心となって、日本の製品生産に携わる9社を集め、製品を認証するテキサス・オーガニックコットン協会(JTOCA)を設立し、一緒に品質基準を定めました。

オーガニックコットンを通して社会貢献

アバンティは「遺伝子組み換えの種を使っていない、化学薬剤を使わない、労働者の人権を守る、児童就労にかかわらない」を守りながら生産に取り組んでいます。「オーガニックを通して地球環境の保全と、社会貢献をする」というのが経営理念です。3・11フクシマ原発事故のあと、被災地の人々を助けるため「東北グランマの仕事づくり」「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」「わくわくのびのびえこども塾」などの活動にも取り組んでいます。

アバンティ(avanti inc.)の オーガニックコットン製品 「PRISTINE」

●原料

アメリカ、インドなどのオーガニックファーマー
紡績～生地～最終製品まで、全て国内加工

塩素系漂白剤、定着剤、蛍光増白剤、
防縮剤など不使用
無染色(生成り)が中心

市販の木綿製品の 問題点

地球上で最も農業を多投している作物は、実は綿花です。地球上で1%の栽培面積しかない綿花だけで全農薬使用量の16%を使用しています。地球環境から農業による環境破壊をなくしていくためには、オーガニックコットンへの切り替えをすすめる必要があります。オルターでは加工食品などにおいて、農薬汚染の多い綿実油の使用を禁止しています。かつてインドの綿農園で一度に500人ほどの死亡者が出た事故が発生しましたが、直前に散布された除草剤が原因でした。インドの綿花産業では児童労働も問題になっています。炎天下の殺虫剤が充満する中で1日中働いて、彼らに支払われる賃金は1日たった200～300円

です。子どもたちは過剰な労働をするうちに、農業による頭痛、吐き気、倦怠感に始まって、皮膚疾患や呼吸器・神経症などの病気になり、やがて癌にも侵されていっています。先進国の大企業のお金儲けのために、途上国の子どもたちが犠牲になっています。

綿花には遺伝子組み換えの問題もあります。PCB、農薬(DDTやベトナム戦争の枯葉剤、除草剤など)、食品添加物(サッカリンなど)、人工甘味料アスパルテームなどを製造し、人々の健康を破壊している悪魔の会社モンサント社が遺伝子組み換え技術を世界中でバラまいています。

収穫された綿花は、木綿になるためには洗浄、製糸、紡績、染色などの工程で合成洗剤、漂白剤、合成染料、難燃剤など多種多様な有害な化学薬品が使用されています。化学薬品まみれの衣服はアトピー、アレルギーなど皮膚障害の原因ともなっています。